場所　〒502-0812　岐阜市八代3丁目27-8「ふれあいスペース」
第143号
2020年6月

わいわい、がやがや、みんなで哲学

哲学カフェ de ぎふ
千秋（せんしゅう）まちかど文庫　通信

運営委員会発行　（主宰:吉田千秋 090-7917-9602　yoshida0@sepia.ocn.ne.jp）

特集「コロナ問題をテツガクする」

長かの子（版画家）

いま私たちは、新型コロナウィルスの世界的蔓延の渦中にいます。100年に一度と言われるこの未曾有の体験をどう見つめ、考えたらいいのでしょうか。さらに、自分の個人的体験としてだけでなく、歴史的経験として共有し、記憶し、記録し、伝えていきたいものです・・忘れてはならない「記憶のエチカ」として。
この「通信」特集号が、その素材の一つとなればければ幸いです。

吉田千秋（主宰）から

＜記憶のエチカ・・忘れてはならないことは何か？＞

5月25日、「緊急事態宣言」が全国すべての都道府県で解除された。安倍首相は、「わずか1ヶ月半でほぼ収束させ」、「日本モデル」を世界に示したと、自分の成果であるように語った。数々の無策、遅策、誤策、愚作によって、国民のいのちとくらしを危機に落としてきたことに対する反省はなく、責任も取らないで。

ほんとうにこれで、安全で、安心な、人間らしい営みが開けてくるのだろうか。上から目線で見つめ、話し、国民にまったく信頼されていない指導者のままでは、お先真っ暗でしょう。そもそも今回の「成功」は、あきらかに、国民及び非「国民」すべての日本在住者たちの、辛抱強い懸命な努力と、それこそ賢明な状況判断とがもたらしたものであろう。

（各務原アルプス・明王山）

人々はこの間幸いに考える時間をもち、「お上」の数々の失政に気付き、声を挙げ、抗うようにもなってきた。自分の都合のよいように検事総長を据えるための法案は、SNSによる数百万の抗議で採決できなくなった。日本の民主主義運動への重要な再出発になったと思われる。いや、そうしなければ明日はないだろう。

いままだ、私たちの未曾有の体験は終わっていない。第二波、第三波は確実にやってくる。それに備えるためにも、この間の体験・見聞・知識をたんなる個人的で一時的な感覚知ではなく、しっかりとらえ返して「経験」知とし、記憶に留めておきたい。その際、自分よりもっと過酷で、つらい状況に置かれ、苦闘した人たちの体験を、忘れてはならない歴史的な「経験」として共有したいものである。

すでに、それこそ記憶に残るすばらしい記録、物語、作品が発表されている。
イタリアでの体験を綴ったP・ジョルダーノも、『コロナ時代の僕ら』の中で、「パンデミックが僕らの文明をレントゲンにかけている。数々の真実が浮かび上がっているがいずれ消えてなくなるだろう・・僕らがいますぐそれを記憶に留めぬ限りは」と記している。

あの惨劇を招いた世界戦争と同様、「記憶のエチカ（倫理）」として留めておきたいものはたくさんあるにちがいない。それはどのようなものなのか？

「テレワーク出来ない人が支えてる　現代文明の根っこの部分」(朝日歌壇)という作品がある。今回のコロナ渦は、「大量生産・大量消費・大量廃棄」という巨大現代文明のいびつさ、もろさ、みにくさを露呈させた。忘れてはならないものの一つは、これを根底において支えている人たちや、この「文明」下で役に立たないとされて差別されている多くの人たちが真っ先に苦境に陥れられたことである。さらに、最先端で懸命に頑張っている医療関係者まで差別にさらされたことも。

すべてが終わったとき、前の時代と同じもの、同じことが横行しないために。

（2020．6．1）

＊今回「コロナ問題をテツガクする」の特集にあたって、過去11年の記念行事に登壇して頂いた記念講演者に、特別な寄稿をお願いしました。皆さんお忙しい中、快く応じていただき、原稿を届けて頂きました。お礼申し上げます。

＜特別寄稿＞

○池内　了（いけうち　さとる）
哲学カフェ9周年記念講演者「大学の軍事研究ほんとにいいの?」
＊名古屋大学名誉教授。宇宙物理学、科学評論。世界平和アピール七人委員会メンバー。
『科学者と軍事研究』（岩波新書）、『なぜ科学を学ぶのか』（ちくま新書）、『科学はどこまで進化しているのか』（祥伝社新書）ほか。

＜コロナ禍の言葉と哲学＞

新型コロナウイルスに因んで、端的に「コロナXX」と語られる言葉が流通し、それぞれが今は説明抜きでも理解できますが、この騒動が終わると忘れ去られる運命にある言葉も多くあると思われます。

さて、どれが末永く記憶され議論され続け、それはどのような事柄に発した言葉なのでしょうか。今書き留めておき、時間が経ってから見直し、この時点を思い返す縁とするのは意味があることではないかと思っています。哲学の課題に絡む言葉も多くありそうで、ここに書き留めておきましょう。

やはり経済に関する事柄が多く、コロナ倒産、コロナ失業、コロナ不況、コロナ成金、コロナ融資、コロナバブル、コロナ詐欺、コロナ格差、コロナ難民、などが目につきます。感染したくないため険悪な雰囲気も広がっていて、コロナ恐怖、コロナバッシング、コロナ自警察、コロナブルー、コロナ離婚、コロナ差別、コロナ鬱、コロナ辞任、コロナ抑圧（報道）、コロナDV、コロナ虐待、コロナ疑惑、などが挙げられます。不穏な言葉ばかりですね。

私が一番心配するのは、今後増えると思われるコロナ自殺（リーマンショック後に増えたように倒産・不況・就職難などで希望を失う人が多く出る）、そしてコロナ関連死（コロナ医療が逼迫したために通常の医療が満足に受けられない、医療体制が手薄になって介護・看護が不十分になって死を迎える）です。さらに、コロナ騒ぎに便乗してコロナ改憲が狙われる危険性があることに注意を怠ってはなりません。

影響が後々まで長く尾を引いて使われるのがコロナ世代ではないでしょうか。十分な教育が受けられなかった世代（なんでも教育不足として揶揄される）、就職氷河期の世代（経済の不調と卒業期が重なることによって就職状況が困難になる）、というふうな呼称が定着しそうな気がするからです。不幸な時代に巡り合わせた、で済む問題でしょうか。

以上のようにコロナに関わる言葉によって、いろんな情景がクローズアップされてきます。さて、コロナがもたらした最大の哲学的課題は何なのでしょうか？

○中西新太郎（なかにししんたろう）
哲学カフェ1周年記念講演者「若者が主人公になる社会へ!」
＊横浜市立大学名誉教授。関東学院大学教授。社会哲学・青年論。
『若者保守化のリアル』（花伝社）、『若者は社会を変えられるか?』（かもがわ出版）、『人が人のなかで生きてゆくこと―社会をひらく「ケア」の視点から』(はるか書房)など。

＜コロナを語る薄っぺらい言葉＞

コロナ禍の出口が見えないから不安だという。新型ウィルスの侵襲は年単位ですすむのが普通だから生活が狂う期間の長さからして不安は当然に思える。

しかし、私たちの心理を覆っている鬱陶しさ、もやっとした苛立ちは、もっぱら、新型コロナウィルスのつかまえ難さにあるのだろうか。そうではないと思う。ウィルス対策をやかましく語りかける言葉の、どうにも薄っぺらいつくりつけこそが、この数ヶ月の日々を鬱陶しくさせているのではないか。

「いまが正念場」「この2週間がヤマ」「気を緩めてはいけない」・・・安部首相や小池都知事らが何度となく繰り返す発言は、言い方がいくら丁寧でも、重石がない。リアルな現実をつたえる裏づけのない言葉は綿毛のように空中をただよい、鬱陶しさを社会に充満させてゆく。なぜなら、薄っぺらい言葉がまき散らす寒々しい「がんばれ」感情は、フェイクニュース分析があきらかにしているように、社会全体に伝染するからだ。

自分たちが呼びかけている言葉の軽さに気づかないのは傲慢である。権力を後ろ盾にしているから自らの傲慢にも気づかない。生活の「専門家」でもないのに「新しい生活様式」などと平気で言ってのけるおかしさ！「感染を防ぐための注意事項」とでも言えばそれでいいのに。

こういう傲慢な鈍感のために、狭い部屋で肩寄せ合って暮らさざるを得ない家庭の辛さも、会社からさっさと首を切られ行き場のない非正規労働者の窮状も、ふだんからぎりぎりの勤務状態で人手も足りず責任だけがのしかかる介護施設や保育所の「3密」労働も、見事に無視されてゆく。

生活のもっともきびしい現実を全力で受けとめようとせず、「新しい生活様式」をとくとくと吹聴するコロナ政治の病毒は、自粛警察という鬼子を育てる。必要なのは、空間も時間も人手も十分のゆとりを備えた新しい社会システムの構築ではないのか。いまこそ据えるべきその課題が抜け落ちたまますすむ政治は空虚なだけでなく有害である。

○**中嶋哲彦**（なかしまてつひこ）：10周年記念講演者「道徳・モラルはどのように培われるのか?」
＊愛知工業大学教授（教育学）。名古屋大学名誉教授。「なくそう! 子どもの貧困」全国ネットワーク世話人。
『国家と教育 ―愛と怒りの人格形成―』(青土社)、『考えよう! 子どもの貧困 なぜ生じる? なくす方法は?』（PHP研究所）など。

＜新型コロナ危機と格差・分断問題＞

新型コロナウィルスの蔓延が続くなか、私たちは従来の日常生活や経済・産業活動をできるだけ抑制して、感染しない=感染させないための努力を続けています。この努力は政府の「自粛」要請を受けて行われていると考えられているかもしれません。しかし、市民は、政府が要請する前から、感染の抑制には経済・産業活動を含む日常活動の抑制が必要だ、と理解していたと思います。そして、それを声に出した人もいれば、心のなかで願っていた人もいたと思います。

しかし、政府はなかなかこの声に応じませんでした。経済・産業活動の抑制による経済的損失と国民の健康・生命を天秤にかけていたのかもしれません。損失補填や生活保障に必要な経費を心配していたのかもしれません。実際、失業したり所得が減少したりした人や自営業者への支援は不十分であるだけでなく、出し惜しみさえしていると思います。

さらに、学校に行けず精神的ストレスを抱える子ども・若者や、親の所得が減少したことで三度の食事させ満足にとれない子ども・若者がいることもわかってきました。また、失業したり家業がうまくいかないことでストレスを抱える親と子どもがいっしょに過ごすことで、児童虐待の危険が高まっている、とも指摘されています。子ども・若者支援活動のメーリングリストには、毎日のように相談や支援活動の情報が寄せられています。

医学的には誰もが「平等」にウィルス感染の危険にさらされているとしても、実際の感染リスクの大きさ、感染対策がもたらす不利益、休業補償や生活保障の不十分さは、不利な立場にある人々により大きな不利益をもたらします。たとえば、ICTを利用した遠隔授業が推奨されていますが、家庭でインターネットを利用する環境が誰にでも整っているわけではありませんから、これを安易に導入すれば学習機会の不平等を拡大しかねません。

国連の子どもの権利委員会は4月8日、「新型コロナウィルスが子どもに及ぼす重大な身体的・情緒的・心理的影響について警告し、児童の権利を擁護を求める」との声明を発表しました。そのなかで、オンライン学習によって不平等を拡大させてはならないことや、生徒と教師の生の交流を大切にすべきことを指摘しています。

政府は「九月入学」を導入して授業の遅れを取り戻すことを検討していますが、これには日本教育学会など多くの教育学者が否定的な見解を表明しています。これは問題解決の先延ばしであるだけでなく、新たな問題を生み出しかねない愚策であり、惨事に便乗した強権政治（ショックドクトリン）だと思います。

ポスト・コロナの社会の在り方を考えることも必要です。そのときは、個人の価値、そして自由と平等を軸に考えていきたいと思います。

〇愛敬浩二（あいきょうこうじ）：8周年記念講演者「さて、これからどうするこの日本?」

＊早稲田大学教授（憲法学）、「立憲デモクラシーの会」呼びかけ人。

『改憲問題』(ちくま新書)、『立憲主義の復権と憲法理論』（日本評論社）、『私たちは政治の暴走を許すのか(共著)』(岩波ブックレット) ほか

＜新型コロナの教訓＞

中国が新型コロナウィルス感染を抑え込んでから、メディアでは、強権的な国家体制だから感染を収束することができたとの言説がまかり通るようになった（中国政府もそう主張している）。確かに、Liberal Democracyの体制をとる欧米諸国の感染状況は深刻である。しかし、ある国では感染が深刻化し、ある国では深刻化しなかった要因は様々であると考えるべきであり、現時点で「新型コロナの教訓」を安易に導き出すのは危険である。たとえば、「強権的な国家体制」の代表格であるロシアの感染者数が世界第3位（35万人。5月25日現在）であることが、何よりの反証である。

強権的な国家体制の代表格の一つのシンガポールは、当初、「感染対策の優等生」扱いされていたが、現在では3万人を超えたとのこと（中日新聞2020年5月25日朝刊）。人口570万人のうちの3万人だから、日本の人口規模で計算すると63万人、米国の規模だと168万人になる（5月25日時点の米国の感染者数は164万人）。大統領選との関係で中国の責任を追及するトランプ大統領の味方をするつもりはないが、中国における市民的自由の保障のレベルが、Liberal Democracyの水準に見合うものであれば、国際社会が初期段階で有効な対策をとることができたのではないかという問題も、将来的にきちんと検証されるべき事柄であろう。

新聞報道によれば、シンガポールの感染者の9割超が低賃金で働き、不衛生な環境で生活する外国人労働者であるとのこと。米国についても、有色人種の感染率が高いことが報じられている。現時点で確実に語りうる「新型コロナの教訓」があるとすれば、経済のグローバル化の結果として世界的に蔓延した感染症の被害は不均等なかたちで、経済のグローバル化の下で不利な立場にある人々にもたらされたということであろう。

この教訓は、私たちの未来のために、真剣に議論すべき価値のある問題である。

○西郷南海子 (さいごうみなこ)：「哲学カフェ」8周年記念講演者
＊「安保関連法に反対するママの会」発起人。京都大学教育学研究科博士後期課程卒（教育学博士）。
『だれのこどももころさせない』（かもがわ出版）、『あきらめることをあきらめた』（共著：かもがわ出版）、『「反緊縮! 」宣言』（共著：亜紀書房）など。

＜コロナウイルスと「あつ森」からの挑戦状＞

2月末の突然の「休校要請」から、すでに3カ月が経ちました。我が家でも子どもたち3人との24時間自宅生活を行いました。学校に行くこともなく、お友達と遊ぶこともなく、ただただ家にいるだけの毎日です。息が詰まってしまうのではないかと心配していましたが、意外にも平穏に乗り越えることができました。

秘訣は、なんと「ゲーム」でした。3月末に任天堂から発売された「あつまれ　どうぶつの森」（略称「あつ森」）というゲームソフトに、我が子たちは夢中になりました。このゲームは、無人島を開拓し、家を建て、それぞれが好きなライフスタイルを追求するという、いわば「暮らしづくり」をテーマにしています。仮想空間の中で「外出」し、季節がめぐるのを味わい、思い思いの生活をするという内容が大ヒットし、全世界で1300万本もの売り上げを記録しています。

ゲームなんて、と眉をひそめる人もいるかもしれません。でも、子どもたちが朝から晩までせっせと「あつ森」に励んでいるのを見ると、学校から配布された宿題の束がとても色あせて見えてきました。本当は、子どもたちはこういうことがしたかったんじゃないかと…。島の雑草を抜いて球根を植えたり、珍しい魚を釣って町の博物館に寄贈したり、着たい服をデザインしたり、自らのアイデアで生活を創り出していく。これは、教育学者ジョン・デューイが「シカゴ実験学校」でやろうとしていたことのゲーム版だなとも思いました。

このコロナ禍での「あつ森」の進撃はまだまだ続きます。アメリカ各地の有名美術館が「あつ森」に加わり、何万点という所蔵品のデータをゲーム内でダウンロードできるようにしました。また香港やフランスでは、街頭ではできなくなった政府への抗議活動を「あつ森」の中で展開するという動きさえあります。

こうなってくると、インターネットとリアル世界を対立するものとしてとらえるのではなく、いかに前者を後者に役立てていくかという問題設定がカギになってきます。「あつ森」からの挑戦状、あなたは受け取りましたか？

みなさんから寄せられた意見

○　＜「新しい生活様式」
皆さんはどのように受け止めましたか？＞

通販も利用　電子決済の利用　筋トレなヨガは自宅で動画を活用　歌や応援は距離をとるかオンラインで・・。

自宅でのネット環境をどう整えればいいの？　どんな道具を選べばいいの？

どのように使いこなすの？　資金はいくら必要なの？

アナログな私は、ネットの活用が苦手です。機械の扱いが苦手です。人と会って話をして繋がっている私は、新しい人との繋がり方を取り入れる必要があると感じています。

賢い人が生き残る仕組みになっていくようで、落ちこぼれないように頑張らないと!!　私も変わっていく必要があります・・強くて優しいひとに。

（子猫）

○　＜コロナには罪はない＞

5月に入って、ソーリ周辺の「ご威光」も地に落ちた感がある。次々に出される政策は急場しのぎにもなっていない。モグラ叩きのように、あっちを押さえてもこっちが飛び出す。

うまくいかない責任は、協力しないコクミンの側にあるのではない。コクミンは協力していたら食えないのである。そうでなくても、そろそろサボりたいのである。「国民」するのにも金が続かない。もう疲れたのである。そもそも、ソーリは「総理」やってないじゃん。

今、コクミンはソーリの足元を見ている。ソーリはコクミンの顔色を窺っている。専門家会議は失態続きで発信力を無くしている。誰もが被害者気分だ。とくにソーリは、自分が一番の被害者だと感じているのではないか。そして被害者意識からは「責任」の二文字は出てこない。本来責任を取るべき立場の人たちが、「どうしてみんな言うこと聞いてくれないんだよぉ」みたいな、いじけた被害者意識に陥ってしまうのは何故なのだろう。

少なくとも現状を見ているかぎり、コロナには罪がない。

（MIEKO）

○　＜子ども達のいま＞

子ども達の本当の声を聴く「チャイルドライン」の活動をしています。予期できなかった新型コロナウイルス、予期しなかった三月からの休校。日常生活がすっかり変わり、子ども達の声には、「ひまでしょうがない。」「将来のことが不安になってくる。」「最近体調が悪い、コロナかもと心配。」「お母さんが怒ることが多くなった。」と、不安な声が多く寄せられています。

一方、「学校が好きじゃないので、休校になってちょっとホッとしている」の声もあります。その中には虐待を受けていると思われる声もあります。毎年九月には子どもの自殺が大きな問題となっています。休み明けの子ども達の状況に、注意が必要です。

ステイホームの生活が3か月目に入り、不安を抱えた彼らの声を聴く、大人でありたいと考えています。

（obobobo）

○　＜終わりがあると信じているので・・＞

休みの間にパソコンで映画を観ようかと思ったり、芝居も延期続きで役者さんへの支援にもなるかと思ったり、いろいろ調べてみたのですが、「投げ銭」「寄付」「カード支払い」の仕組みに違和感を覚えて諦めることにしました。

確かにこれは新しい仕事を作り出しているのかもしれないのですが、昔のようにご贔屓さんになれない人は、大向こうからという仕組みとは違い、お金持ちと貧しきもののプラットフォームを明確に区分しているように感じます。

知識の違いや趣味などで、見えない格差や区分けは普段の生活の中にもありますが、今まで分けられていなかったところに選別が行われるところに、失う寂しさを感じます。

達磨を思い出しながら、新しい変化に気を整えながら、自分の身の丈に合った新しい暮らし方を選択しなくてはいけないと感じています。

「人はその他の生物と違い、理性がある」と、『ソフィーの世界』の中で読みましたが、自分の哲学を持つことがこれからの選択にとても必要なのかなと思っています。

(U・Takako)

○　＜私の巣ごもり＞

コロナ禍のもと、仕事はずっとあり、私の暮らしは幸いにして変わることはなかった。ただし、稽古事や勉強会がなくなり、私は毎日畑と庭ですごす。やまぶき・つわぶき、摘み菜にブロッコリーを食べる。彼ら(前の野菜たち)はじつに健気で、もうおしまいかなと思っても、2，3日すると十分の育ちをしてくれていただく。タケノコ、わらび、ウドと続く。絹さやえんどう、スナックえんどう、グリーンピース、ふき、アスパラ、破竹、ニンニクの芽に新玉ねぎ、春大根・・・まだまだあるよ。ぬか漬け沢庵を水にさらしぐらぐら茹で味をつけて食べる。かんきつ類をしぼって冷凍に、いちごはジャムに、ふきや大根の葉っぱは炒ってふりかけ風に。庭では一面木香バラが咲き、芍薬がさき、今はバラ。薬草園となる庭・どくだみの花が咲いたら刈り、干せば半年分のお茶となる。どくだみ＋焼酎+ミントで化粧水を。まもなく梅漬けが始まる。都会で巣こもる友人たちに野菜を送り続けた。

（尚）

○　＜スラムからの「逆襲」を考える時＞

近年「アメリカ・ファースト」とか「都民ファースト」とか言った、あたかも「民主主義を再活性化」を訴えるかのポーズをとる政治家が登場し、大きな大衆的な支持を集めることに成功している場合もみられる。だが、現在の200余の国家や国民・市民がよって立っている土台のところで、いつも「ラスト」と宣告されてきた貧困層やスラムに目を向けない流れが太くなってきた。

そんな中、昨今のマニラやムンバイの事態・・・ロックダウンを解いた瞬間に起きたコロナ汚染の急

激な再拡大は、スラムや貧困層からの「逆襲」と言えないだろうか。

現代世界を巻き込む重大な問題は、新型コロナや格差社会に限ったことではないが、気候変動問題や環境汚染問題も含め、深刻な問題兆候が具体的に表れているものも少なくない。それらに真面目に向き合って抜本的な解決に乗り出せなかったら、第二・第三の災禍が教えてくれることになるだろう。

はたして人類はどこまで持ちこたえられるかと不安になる。自滅の道に踏み込まないためにも、「下からの視点」「辺境からの視点」による想像力・洞察力が大切なように思います。

（フィリピン・ウオッチャー）

○＜いま、救急医療専門士の勉強をしています＞

今、世界で必要なのは『新型コロナウイルスに対しての覚悟』だと思う。医療従事者がかわいそうや心配だという声が多いが、医療従事者というのは覚悟を持って仕事をしている。

人それぞれ環境や生き方は違う。だからこそ、今は一人ひとりができることを真剣に考えてほしい。自宅で過ごしている人は何もしていないわけではない。むしろ貢献している。自宅にいるだけで何百万もの命を救っている。

もし自分の周りに医療従事者がいたら、一言「ありがとう」や「お疲れ様」という言葉で救われると思う。僕はそんな温かい言葉を伝えることができる人になりたいと感じる。

（サティン：在日スリランカ学生）

○　＜コロナ渦中でのSNSの可能性＞

コロナ禍によって私が思ったことは、SNSが良い使われ方をしたことです。SNSの使い方は様々な意見があります。匿名による特定人物に向けた誹謗中傷、いいね！集めの表面的なやり取りなど、本来、人と人とのつながりを強化するはずのSNSはかえって人間関係を軽薄なものに変えることがあります。

しかし、今回のコロナ禍において自宅に待機することで、「オンライン飲み」という言葉もよく聞かれるようになり、私も久しぶりに幼少時代の友達とオンライン飲みを行いました。そこで感じられたのは、今回このようなきっかけがなかったら連絡を取らなかった人と、「あ、意外と昔と変わらずこんなに話せるんだなぁ」と思えたことです。SNSでたまに出てくる投稿では判断できなかったその人と中身のある話ができて、関係性は今までの表面的なものから前進したと思えました。

コロナ禍によって、やっぱりみんな、人との表面的ではないつながりを求めているんだと思えました。

（歩夢：岐阜出身、大学院生）

○　＜コロナ禍で問題化したことは以前から問題だったこと＞

災害は理不尽にも持たざる者ほどその影響を齎す。だが、いつものように人災で悪化させたのが実情。

岐大も岐大生協もコロナを見くびっていた。だから、平時の暦通りに回そうとして失敗した。NPO地域と協同の研究センターは、議長と理事会ガバナンスを強化した総会規則をこのコロナ禍のどさくさで新設する。抵抗はしたが、恐らく通るだろう。オルタナティブですら、「独裁」に至る。

C.シュミットの「喝采」こそが「民主的」であるという悪趣味な予言が成就しつつある世界に私は居る。歓喜する人々がその恐怖を体感する頃にはもはや

手の施しようがない。些細な問題のうちに芽を摘むことを拒否したのは紛れもない彼ら。どうか、沈没船には「自己責任」で乗って貰って、今さら「私」を巻き込まないで欲しいと、M.フーコーなら言うだろう。

字数の関係で意を尽くさない点がございます。この件で詳しく話を聞いてみたい、話をしてみたいということがあれば、「哲学カフェぎふ」の関係者である旨お申し出頂いた上で、t.kitou0309@gmail.comにメール頂ければ幸甚です。

(Kito Takayoshi)

○　＜75才のつぶやき＞

峠の茶屋で一服。ゆっくりのんびり、まわりの景色を楽しみながらといきたいとこだけど、それは無理か。75年、長いようで短かった道のり。来し方行く末を思う。昨日の自分と今日の自分の違いに驚き唖然とする。あるがままの自分を生きるほかない。

ひとつ言いたいことが・・。近隣の出来事。昨年、7月3日　東長良中の14才男子が、6階建てのビルの頂上から飛び降り自殺。原因はいじめと認定された。コロナがもう半年早く来てくれていたら、この子は死ななくてよかっただろうと考えると辛い。また、合渡橋の下のホームレスの81才の老人が、19才の若者たちに石を投げられて死に至った。これらの事件で、私たちは何を思いますか？

こんな子どもらが育ってしまったことに、私たちの責任はないのだろうか。私たちは何のために子を産み育て、社会を形成してきたのか。何が彼らにそうさせてしまったのか。コロナ騒ぎに紛れそうな今、考えたい。

（ひらつか）

○　＜新コロナ夢想＞

現在のパンデミックは言わば、コロナ宇宙人に地球が攻撃されているようなものである。21世紀、グローバリズムの進展という蔓延の好機を見計らって攻撃の挙に出たわけである。しかも米中対立という世界規模での対応ができない時期を見計らって襲撃してきた。発症までの長さといい、潜在力といい、敵ながら天晴である。

さて、これにいかにして対応すべきか。当然地球全体が攻撃されているのであれば、地球防衛軍を組織して戦わなければならない。その為、即急に臨時世界政府を樹立させねばならないだろう。特にこれから冬に向かう南半球、発展途上国への対応を急がねばならないだろう。そして世界政府が呼び掛けて、最大の臨時募金を募り、世界の叡智と施設を結集すれば、速急にワクチンが作られるだろう。災い転じて福となす。これにより世界平和が同時に招来されるだろう。

しかし、この夢想の反対の方向へ世界は行くかもしれない。世界がロックダウンし、孤立主義、ナショナリズムが更に勢いをます方向である。コロナによる経済危機は第二次大戦前の世界大恐慌をはるかに上回るだろう。人類の英知が結集されるのを切望する。

（ひらみつ）

○　＜コロナ問題は心の問題＞

コロナ問題は、表面的には医療問題にみえます。しかし、「新型」ウイルスは、これからも繰り返し出現します。 地球上でのウイルスの歴史の長さからみたら、人間のそれは、点に過ぎません。

人間が、根絶できるような相手ではありません。外交と同じ発想で対応するしかありません。戦争なんて、勿論、問題外です。でも、防衛的な備えは必要です。 それが、ワクチンや薬の開発や検査法の発展などです。人間側が譲歩して、日常生活変容の継続をして、共生していくしかありません。

そのために大切なことは、謙虚で寛容な心だと思います。つまり、根本的には人間の心の問題だと考えます。

（Dr. ZEN）

○　＜コロナウィルスとnmの世界の変化に注目＞

コロナウイルスと人間の細胞の大きさはおおよそ1対1000 程あるようです。コロナウイルスの世界では環境の影響を特に受けやすいということか…コロナウイルス(0,1nm・ナノメートル)　人間の細胞（100nm）(1,000nm=1mm)。 恐竜が絶滅した後、生き残った動物は恐竜よりは小さかった。俺は畑を借りて野菜や果樹を育てています。雑草のなかで雑草を利用しながら育てるのです。生産量は少ないですが経費はほとんどかかりません。俺の労賃が主な経費です。畑の小動物がずいぶん少なくなりました。小動物には生きづらい環境なのか。「ミツバチがいなくなると3年ぐらい先には人類は絶滅する」などという言葉 もあるようです。最近俺の畑ではほとんどミツバチを見なくなった。町は一見清潔で生活環境が良くなったように見えるけど、nmの世界では命が常に危険にさらされているようで、心配をしております。コロナウイルスと nm の世界での変化を検証する必要を感じます。命と経済活動を検証する。企業や他人の事ではなく、俺・各個人と、俺・各個人の経済活動を検証する事を俺は推奨します。検証するだけではなく、おかしいと気づいたら、俺・各個人が経済活動を変える 勇気と行動を勧めます。スローなブギにしてくれ、「スローな社会」を提言します。

（こうこうぶん わへい）

○　＜アフターコロナをどう考え、どう行動するか＞

世界中、シンコロナ防疫のためのロックダウンなどによる経済活動破壊が急激すぎ、グローバル化にどっぷり浸ってきた我々は、単純に命か金、どちらを選択するかできない状態になっているのではないかと思います。

今後シンコロナによる直接的な死者数を抑えても、経済的困窮による間接的な死者数は増えていきます。そうすると、周辺国から批判されていますが、経済的な打撃を最小限に抑えて、集団免疫を早く獲得しようとするスウェーデンのようなノーガード戦法も選択肢の一つかなと思います。

また社会的には、シンコロナによる影響が比較的少ない年金生活者、公務員、富裕層と影響が大きい非正規労働者、自営業者などの間に分断が産まれるのではないかと危惧します。

とにかく、誰にとってもアフターコロナをどう考え、どう行動するかが喫緊の課題でしょう。

（たなか）

○　＜安倍内閣のコロナ対応＞

「新型コロナウイルス危機対応」を見ていると安倍内閣は国民のくらしや命は守ることなど頭の片隅にもないと思われる。浜矩子さんが述べているように、メルケル首相と比して、安倍首相が記者会見すると、言っていることが同じでも、国民は感動しない。その通りだと思う。

安倍首相の4月7日の記者会見で、イタリア人記者は「緊急事態宣言を発令しても感染拡大が抑えられなかった際、どう責任を取るのか」と日本語で質問した。

首相は「最悪の事態になった場合、私が責任を取ればいいというものではない」と述べた。「お前、責任とって辞めろよ」と突っ込みたいところでした。

こんな安部内閣は一日でも早く退陣してもらいたい。それが「新型コロナウイルス危機対応」であり、私たちのくらし・命を守ることだと思います。

（Y・Takashi）

○　＜声を挙げること＞

コロナの問題で、様々なNGOが活動しています。コロナの問題は何か新しい共通理念を産むでしょう。新しい対処が、実際問題の解決として考えられているでしょう。個人の命の内側に問題があり、個人単位の命が、不平等に決定される。それは偶然的に与えられています。負の偶然は、予防することができます。予防には限りがありますが、何もできないわけではないです。知恵が一部分だけに集中されてきたのであり、取り残されてきた見えにくい部分がありました。

声が挙げられていくことが力になるでしょう。人々が、自分の人生を積極的に生きるようになるでしょう。

（E）

○　＜コロナ禍で、観光都市高山は？＞

先日、ニュースにゲストハウスを経営している知人が出ていたので、訪ねて話を聞いてきました。彼は、古民家を改築し、両親と共にゲストハウスを始めて5年ぐらいになります。「8～9割が外国人観光客だった。たとえ日本が落ち着いたとしても、海外が。同じような宿では、もうやっていけないと言って、閉めた所もある。大手のホテルは、6月末まで閉めて、雇用調整助成金をもらっている。うちは、家族でやっているので、もらえない。銀行の融資が受けられることになったが、1ヶ月半かかった。3年無利子とは言っても借りたものは返さなければならない。来年から返済が始まる。これで、何ヶ月もつのか。何か抜本的な対策が必要ではないか」とのことでした。観光都市高山は、どうすれば良いのでしょうか。

私は、特別支援学校に勤めています。いま学校は、学校を守ることが精一杯で、自分も指示されたことしかできず、ますます管理的にならざるを得ない現実に悩んでいます。

（K・Maekawa）

○　＜命の選別をしないように心から願う＞

5月20日は息子の38歳の誕生日だった。重い障害を持ち、施設で暮らす息子を家族みんなで祝うのを楽しみにしていたが、面会も帰省も禁止が続き、心配で眠れね夜が続いている。

新型コロナウイルス感染拡大が突きつけた問題は、安倍政権の無策・遅策・愚策の露呈と、この危機が新たな“優生思想”を是認しつつ進行していることだ。

テレビである医者が、若い命を救うために老人は「ICUを希望しない」というシールをつけようと言ったそうだ。「命の選別」が公言され、強者優先、社会的弱者が死ぬということを「いたしかたない」とする思考が意識的、無意識的に形成されてしまったのではないか。

今の日本を覆う「新自由主義的な人間観」と重なる。経済的価値や能力で人間を序列化する社会・・そこでは障害者の生存は否定されてしまいかねない。誰ひとり取り残さず、全ての人々を救う為に一刻も早くアベ政治を終わらせよう！

（まり）

○　＜人間らしいコロナ後の社会をめざして＞

今回のコロナ禍で、social distancing 互いの接触を避ける「新しい生活」が推奨されています。人類学者の山極寿一氏は、「共鳴、共感は人間だけにある特性。これを失うのは人間らしさの危機」と言っています。他人と繋がりたいというのが人間本来の姿なのですね。

劇作家の平田オリザさんは、「誰にも生命の次に大事なものがある。ある人にとっては映画、他の人にとっては音楽かもしれない。自分が心震える感動を経験することによって、自分とは違う他人の心のありようにも思いを馳せることができる」ということを言っています。

共鳴・共感・寛容の力を文化が磨いてくれることを再認識しました

コロナ後はますます発展していくであろうAI、オンライン。人間らしさを奪う先端技術になってしまわないよう、それを埋めるのが文化かもしれません。

東日本大震災後何も変わらなかった日本社会。今度こそはそうなりませんように、不断の努力をしたいものですね！

（あつこ）

○　＜黒川検事長辞任をめぐって＞

黒川検事長が賭マージャンを認め辞表提出。検察庁法改正案の一連の問題は極めて疑惑の多い内容で不信感を募るものではあったが、今回の週刊文春の報道による指摘に群がる、与野党のコメントやマスコミの対応の方が違和感を感じる。国民が新型コロナウィルスで自粛を要請している中での、3蜜状態での賭マージャンは心情的にも許しがたいものではあるが、これを理由にして辞めさせるほうが問題だと思う。賭マージャンは世間一般の常識範囲内なら認められるものであり、赤信号で横断歩道を渡っても指摘されれば辞任しなければならないのか？検察とマスコミとの親密な関係を問題

視すべきならともかく、賭マージャンが賭博罪になる云々は全く当たらないもので、これで責任を問われる世の中の方がとても恐ろしい。衆愚政治に陥る懸念はいないだろうか？　真の犠牲者は黒川氏本人かも知れない。

（ryosa）

○　＜新型コロナウイルス感染に想うこと＞

今回は当初からPCR検査件数が伸びないと毎日追及されていたが、改善されない原因は医療資源削減にもあり、例えば保健所の規模が一時期の半分程度に削減されていたが、これはあまり報道されなかった。これらは新自由主義のもとで医療資源を脆弱にした結果である。コロナ危機に入っても厚労大臣の「医療機関の統廃合はこのまま継続する」の発言には驚いた。今後、コロナ感染が一時的に収束しても、医療システムの人的・経済的な資源を削り続ける新自由主義の政策を続けるならば、我々に明るい未来はない。

また、従来から警告して来た「東京への一極集中」も大きな課題である。20世紀初頭までの常識では「大都市は生命にとり危険なところ」だったが、いつの間にか忘れてしまい巨大地震に加えて、新型コロナ感染症リスクの深刻さを突きつけた。現在、急速に進む「オンライン化」と、大都市の感染リスクへの再認識は、首都機能及び民間企業本社機能の地方への移転の必要性が明確になった。既に一部企業では本社機能の部分的な地方移転を実現して、従業員の労働環境を改善した成功例もあり、今後とも官民の機能の移転が広がることを期待する。

（井口）

○　＜世界平和の可能性は？＞

「新型コロナ禍」の最中、民主主義の基本原則・三権分立を破壊しようとする、安倍政権の「検察庁

改悪法案」が今国会では見送りとなった。なぜかタイミングが良いというか、できすぎではないかと思うくらいに、渦中の黒川検事長が違法な賭け麻雀事件で辞職することになった。まだ「悪法案」が確実に廃案となったわけではないが、安倍首相の支持率が27％まで落ちたことも嬉しいニュースである。なり振り構わずやりたい放題の安倍首相も、相当追い詰められていることがわかる。安倍首相退陣が即刻実現することを強く望む。

以前、小説家獅子文六の「異星人の地球攻撃によって初めて地球人は団結し、世界平和は達成される」可能性についてのべたが、このような期待感は全くの幻想であることが分かった。目に見えない地球人の敵、「新型コロナ」との戦いの最中、ドイツとニュージーランド女性宰相の国境を越えた人々に対する訴求力は素晴らしい。それに反して、中国・アメリカの為政者たちの醜い非難の応酬を見るにつけ、世界平和の方向性は見いだせていない。

（島田）

○　＜コロナ危機に接して・・
科学と社会と人同士の関係＞

目に見えないものをどう捉えたらよいか。放射線は計数管、電滋波は受信機などで分かります。ウィ

ルスは目に見えなくても体に入らないようにすればよいのです。要するに口、目や鼻などで食い止めればよいのではないでしょうか。ウィルスは生物(宿主)の中に入って、増えていくのです。だから生物との接触を減らすのです。又、ウィルス独自の好き嫌いがあるし、生物の中で性格を変えやすいこともあるから厄介ですが体に入らないようにすればよいのです。

人は他人と物のやり取りをします。また、さまざまな物を家庭の外に出します。インフラの維持が必要です。そういう人たちもたくさん働いています。買い物に出ていくと人が増えますが、代わりに通販で物を買うと配達をする人たちが増えました。合成の誤謬ですね。一定のバランスと余裕が必要であるという社会の仕組みです。

もう一つ、人々がそれぞれの情報などを確かめ合い、より確かにするとそれぞれの関係をより深く、確かなものになるのでは。目の前には人はたくさんいませんが、色々な手段で人は繋がります。

○△(地名)ウィルスなどと言わずに、もう一度カミュの「ペスト」を読まなくては・・。

（野口）

○　＜コロナ渦は人間への警鐘＞

今、新型コロナウイルスに世界中が振り回されています。これは、私たち人間に対する”警鐘”と言えないでしょうか？

今まで人間がわがもの顔に振舞ってきた付けが今来ているのではないでしょうか？

弱者(貧困層など)がないがしろにされている現状、本来、人間は誰もが等しく自由で平等であるはずです。今こそ、世界中が一つになって、真剣にコロナと戦って、お互いに励まし合い助け合って行くことが何より大切ではないかと思います。

地球温暖化も深刻です。わたしは今、ときどき近くの山を散策して自然を見直しています。日頃気が付かなかった新緑の色とりどりの美しさ(自然の美しさ)に感動しています。

（市原弘生）

○　＜むち打ち　罰金を避けた日本＞

人に感染する新型コロナウィルス(covid-19)が発生した。感染を抑えるため世界各国でそれぞれに緊急事態宣言、類似の”宣言”が発せられた。都市間の移動制限と個人の外出制限である。各国では罰則付きであったが日本では罰則は無い。衛生についての知識と倫理観とで”自粛”は守られた。急に必要な行動は許容範囲である。例外は1万軒に4～5軒のパチンコ屋さんとか、1万人の中でそれを守らない数人の人、とかはいたが、だいたいは手洗いなど感染防止基準の行動は守られた。どんな力の組み合わせでこうなったかは、本当は不明である。

私の見方では、現状の日本人の民主主義的意識の総体の現れと見たい。人々が科学的な感染防止基準をある程度理解して自らの行動として捉え、それを「むち打ち」や罰金で行動させられることを拒否したことである。もし仮に感染防止など意識せず行動する人が1万人のうち3千人いたら、「むち打ち」、罰金、拘束も支配者はやったかもしれない。

将来発生する危機回避においても、基本的人権を守った危機回避行動としたい。

（アダム・スミス）

＜三陸だより(8)＞「岩手県は感染者ゼロ　なぜか？」

今春は、県外の多くの友人からこう尋ねられました。「なぜ岩手は感染者がでないのか？

岩手県に感染者が確認されていない理由については、さまざまな憶測があります。広い県土と、低い人口密度が関連しているものと考えられますが、結論から言うと、これといった要因はわかりません。

一方、「検査数がそもそも少ないのでは」という手厳しい指摘を受けたこともあります。そこで、県はある時期からは、TwitterやLINEで、毎日検査数を公開しています。5月20日時点で、568件の検査数があり、いずれも陰性（不検出）とのことです。地方部ではドライブスルー方式の検査も開始しているようです。

岩手県内の様子ですが、流行が拡大するにつれ、町のひと気は減り、マスク・消毒液・ハンドソープなど、多くのものが店頭から消えました。これは他の都道府県と変わりありません。5月下旬になり、少しずつではありますが、ようやく店頭に並ぶようになりました。

また、県内から多数の観光客が訪れる大型連休には、大きな打撃となったことは間違いありません。私も、大型連休中に外出したところといえば、食料品を買うためのスーパーへ行ったことと、家ごもりに向けて書店に行ったこと、また、車から一歩も降りない形で新緑を求めてドライブに行ったくらいでしょうか（書店はものすごい客数でした）。

小岩井農場の桜

最後に、県民の関心が高い高校野球について。菊池雄星選手、大谷翔平選手、そして佐々木朗希選手を生んだ岩手県では高校野球の関心が高く、今年も甲子園で高校生の雄姿を見る姿を楽しみにしていた県民は多くいました。夢を追ってきた球児にはかける言葉も見つかりません。この経験が、将来の糧となることを祈るほかありません。

（M）

＜びっくりWORLDぎふ No.8＞　「やんぐりどん」

チーン　チーン　チーン　「やんぐりどん」の御渡りだ。各家では鉦の音が聞こえてきたら、南天の葉を塩水につけ、部屋の隅から室外へとふり、急いで戸を閉めきる。そして「やんぐりどん」が通り過ぎまで静かに待つという。私はこの話を聞き、昨年の夏7月14日の夕刻に、「やんぐりどん」が出発する山県市西深瀬にある隼人神社に行きました。

神社には「やごろう・奥方・従者」の3体の人形が立てかけてありました。人形の大きさは50センチほどで、ペープサートの人形のように竹にくくられていました。胴体は藁で作られ、和紙の裃(カミシモ)や着物をき、両袖に卍が書かれています。従者は丸餅を7個菰に入れ背負う。その餅に各家からはらわれた悪い物がくっつくのです。3者とも誇張されたシンボルをもつが、総じて愉快な人形たちでした。夕暮れを待ち「やんぐりどん」の御渡りのため、人々は集まります。

鉦を先頭に御幣、3体の人形、そのあとに人々は

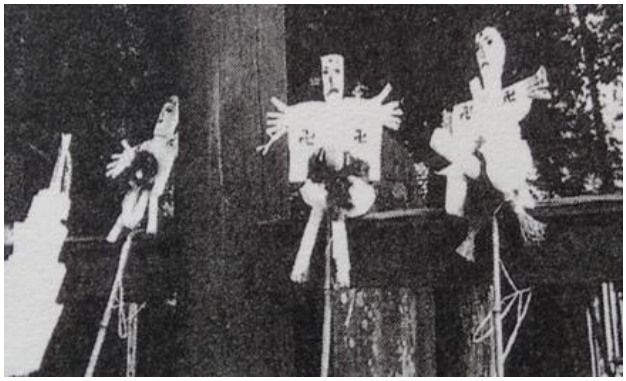
連なり、伊田洞地区をくまなく歩きます。最後は地区の境にある鳥羽川の岸に御幣と人形をたて、人々は御祓の祝詞と般若心経をとなえ終了となります

さて、この「やんぐりどん」は虫送りではなく、夏の疫病退散を願う神事です。神仏混合の時代、神社の神主たちが御師とよばれ各地の檀那をまわって御祈祷をし、お札を配るなどをしていた。この地区にも津島神社の神主・堀田弥五郎が奥方と従者をつれてまわってきた。ところが疫病がはやり、村人たちはこの神主たちに弁当を持たせて帰ってもらった。それから毎年疫神を送る神事となったという。

また、東濃には弥五郎神社があり、神社の由緒によれば、「織田・武田の兵乱の頃、御師が現れた。盗賊かと恐れた村人が殺してしまい、そのあと疫病が蔓延する。御師の祟りではないかと津島神社に謝りにいくと、疫病はたちまち消滅する。村人は白骨を埋め弥五郎殿と称した」と。この「やごろうどの」が「やんぐりどん」となり、疫病を防ぎ五穀豊穣を願う祀りとして続けられてきたのです。

さて、新型コロナウィルスは退治できるかしら？

（佐藤尚子）



＜世界一周貧乏旅　その11＞「僕らのさよならとソーシャルディスタンス」

みなさんは人との別れ際、どのようなあいさつの仕方をしていますか。

僕がイギリスに住んでいた時は、人との挨拶にはほぼ必ず握手があり、「Hello」「Bye」に握手がセットなのに加えて、「特に別れを惜しむタイミング」の場合はハグをすることもありました。

日本人の感覚からすると、街中で抱き合うなんて、恋人でもない限り身体の接触が強すぎて違和感がありますよね。僕もはじめはかなりぎこちなくハグをしていました。

それに対して、多くの日本人の別れ際といえば、「さようなら」「お気をつけて」「また」と何度も何度も言い交わし、後ろ姿が見えなくなるまでじっと見守る。そんな文化です。それが僕にはなんだか濃すぎるというか、体にいっさい触れていないのに、とてつもなくディープな別れ方に感じます。

思いやりと真心の大げさな表出こそ、良き日本文化だ、というのももちろん理解します。ただ、僕個人としては、握手をがしっ！として、さよなら！で済むのが簡潔で、しかも身体に触れ親密な印象を持

てるので、そちらの方が好みではあります。ただそんな非接触型の日本のコミュニケーションも、コロナ蔓延の今日では感染拡大抑止に一役買っているかもしれません。

握手やハグ、キスを日常で行う欧米各国でコロナウイルス感染者がものすごい数で増えてしまっているのに対し、先進国の中で比較的日本は低い感染者数に留まっています。感染拡大を防ぐためには、人と人との物理的な距離を保つことが重要とされており、日本のコロナ感染者数が世界の中で比

較的落ち着いているのは、人とのコミュニケーションの際にもともと身体に触れることが少ない文化だったため、身体接触の高いコミュニケーションを取る欧米よりも感染者が少なくなった、と言えるところもあるのではないでしょうか。

日本人の濃厚すぎる別れの挨拶も見方を変えるなら、わかりやすく親密性を表すことができる身体接触が少ない代わりに、言葉での長い別れの挨拶といった、良い意味でディープな非接触的なコミュニケーションによって、相手に触れることなく親密性を共有することができます。

その、一見すると相手との距離が開きすぎているように見えるコミュニケーションも、物理的に距離を開けながら親密性を感じることができるという、感染症拡大防止に大いに役に立つ日本ならではのソーシャルディスタンスが可能なようです。

ではみなさま、お体にお気をつけて。

（カモノハシタニ）

伊藤計劃著　『harmony（ハーモニー）』 ハヤカワ文庫

友達からこの本を薦められた。SF小説なんて何十年ぶりだろう。『ハーモニー』のタイトルを聞いたとき私は甘い柔らかいピンク色の物語をイメージしたものだ。しかし・・。

この話は、ミァハ、トァン、キアンの3人の女子高生が自殺を企てるところから始まる。実は舞台となる近未来では、大人になるとだれもがWatchMeというソフトを体に入れる。病気になればWatchMeがダウンロードされ、管理する政府は適した薬を家庭用メディケアを通して作らせる。だから、いつも均衡のとれた体を保つことができる。しかしそれは政府に管理されることでもあり、ミァハは自分たちの意志で、大人になる前に自殺をしようと2人の友達を誘う。ミァハはそこで死んでしまう。

それから13年後、28歳のトァンはWHOの上級野戦監察官となり、医療軍で働いていた。キァンとの再会。その席でキァンは、「ごめんね、ミァハ」という言葉を残して自殺する。同時に起きた6582人の自殺事件。トァンは人間の意識を操る組織の捜査に乗り出す。

物語の背景に2019年アメリカでおきた大暴動があり、それが世界の紛争地域での核戦争に発展し、そこで突然変異したウィルスが世界中に蔓延する。その結果、政府はなくなり、健康と幸福を管理する高度医療社会の「政府」が作られることになる。WatchMeは、心身の健康、幸福を政府によって管理するツールであるが、感情や意識、意志までもコントロールしていく。ハーモニー・プログラムが始まると自殺も争いもなくなるが、個々人の「わたし」もなくなり、一個の社会のリソースになってしまう。

伊藤氏は、2008年に病床でこれを書き2009年に逝ってしまった。だから、今日の新型コロナの大災禍は知らない。しかし、体温や心拍数を管理している国家を知ると、この本が描いた世界が現実味を帯びてくる。多分に彼自身が、意識のある世界とない世界を行き来していたから、痛々しくも淡々と描けたのだろう。白を基調とした、淡い色の風景の中で、真紅の色が小説をすすめる。

（かこちゃん）

2020年前半 哲学カフェ、第24期の予定

場所 岐阜市八代3丁目27-8「ふれあいスペース」
例会は19:00～21:00です。

第143回例会 5月14日(木)	**「急増するフリーランス、外国人労働者。どうなるの？」** ＊混迷続きの外国人労働者受け入れ問題にくわえて、新たに浮上した労働問題。 ＊「労働者」ではなく、個人自由契約のフリーランサー。その問題点を探る。
第144回例会 6月11日(木)	**「あらためて家族のいまと、その行く末は？」** ＊「万引き家族」で示されたように、日本でも、家族・家族観はかなり多様化した。 ＊でも、いまだ「家族」主義に拘泥し、個々人の自立を阻むものになっていないか。
第145回例会 7月9日(木)	7月例会の開催も現段階では見通せないため、別途、テーマも含めて 連絡をさせていただくことにします。

中止しました
中止します
未定

「哲学カフェ de ぎふ」ホームページ 毎回更新中 !! http://tetsugakucafegifu.jimdo.com/

【お知らせとお願い】

＜今後の例会について＞

●６月例会も休会します。ただし、７月は記念行事は難しいですが、例会は行う予定です。

●7月例会は、定例の第２木曜日（７月９日午後7時～）「ふれあいスペース」で行います。
テーマは「コロナ危機から見えてきたものは？」です。

●８月から第２４期（～12月）が始まります。テーマの提案を寄せて下さい。
7月例会前に決めたいと思います。

＜「哲学カフェ通信」は継続して刊行します＞

７月初旬に刊行するNo.144 は、「コロナ問題をテツガクする（続）」として特集号を組みます。今回以外の記念行事の講演者にも特別寄稿をお願いします。
今回も、多くの皆さんからの投稿を期待します。友人・知人などにも投稿要請願います。
テーマをしぼって400字ほど。６月２４日(水)までに。
記名は自由ですが、投稿の際には本名・連絡先お願いします。
なお、編集のため、多少の改変は了解願います。
送信先　yoshida0@sepia.ocn.ne.jp　（吉田千秋）
問合せは、上記他、携帯も利用願います…090-7917-9602

＜運営資金協力のお願い＞

・これまで参加費200円をお願いし、ストックとあわせてやりくりしてきました。だが、この間例会はなくとも、会場費は共同出資で支払わなければならず、「通信」印刷費も必要です。とくに今回のNo.143はページ数も多く、できるかぎり多数をカラー印刷して普及したいと思っています。

・ということで、こんな際に申し訳ありませんが、協力をお願いします。
いくらでも結構です。下記の郵便口座への振込お願いします。協力頂いた方には、今回の「通信」を一定数郵送します。

・郵便振込：口座記号・口座番号 00810　1　142912
加入者名 哲学カフェ de ぎふ、千秋まちかど文庫